北野高校150年記念誌コンセプト

150年誌のテーマ＝次の百年に向けて――北野と地球の百年

北野高校150年記念誌委員会

■次の百年に向けて

　2019年、吉野彰さんのノーベル賞が決まり、記念誌の核として、吉野さんを据えることが企画の前提となりました。「リチウムイオン電池」が切り開く環境問題解決の可能性という受賞理由が特に重要です。

　「次の十年」ではなく、「百年」とした理由は、地球環境・人類が、百年後、今と同じように継続しているかどうかは自明ではない、という問題意識から発しています。2023年は、SDGsがターゲットにしている2016年から2030年のまんなかに当たります。この文明のターニングポイントに立ち、それでは、私たちの学校（日本近代の最初期にできた学校の一つ）は、これまでの百五十年、この文明の推進にどのように関わってきたのか――記念誌はその問題を考える機会を（特にこれからの世代に）与えるものにしたいと思います。そして、これからの百年・百五十年へ向けての課題を見通し、構想とその実践に進んでいくきっかけになるものとしたいと思っています。

　「手塚治虫」というモチーフを使う意図もこれに関係しています。彼は人間の文明を相対化して捉え、その愚かしさとその希望を、時空を超えたスケールで表現しました。ライフワークだった「火の鳥」はその典型です。また、例えば「アトム」は〈自然〉に反し、〈文明〉によって生命を得た存在として設定されています。彼は自然と文明と人間の相克を乗り越えようとする課題を担いますが、これはまさに私たちの課題です。

　吉野さんの発明は、スマートフォンや電動自動車が日常化する世界を開きましたが、それは同時に希少金属の争奪を巡る悲劇を引き起こしています。コンゴ民主共和国の婦人科医・人権活動家で、2018年のノーベル平和賞を受賞したデニ・ムクウェゲ医師は、紛争下の性暴力の被害者の治療・救済に力を尽くしていますが、その背景には電子機器の材料になる希少金属資源をめぐる紛争があります。私たちはスマホの向こうに暴力や児童労働の実態を見なくてはならない。リチウムイオン二次電池ができてよかったね、では話は終わりません。

■「知」というテーマ

　多角的な視点から本質を捉えうる力が「知」の本質です。北野の学校課題や求める生徒像の中にも「知的」という言葉が散見されます。この伝統的キーワードである「知」の力を「次の百年に向けて」生かしていくヒントとすることを記念誌のコンセプトの中心に据えたいと思います。

　古代の聖賢がいうとおり、何がわかっていて、何がわかっていないかということをメタレベルで認知できる力が「知」であり、そこには謙虚に過去や現在、自他と世界を見渡す態度が伴わねばならない。これは、たんなる情報処理能力の高さや知識量とは次元を異にするし、もちろん、大学や研究の世界に限られるものではありません。そして、ほんとうの「知」には、目の前の苦しみを救おうとする志が伴い、それは、例えば、スマホの向こうにある苦しみを救おうとすることにつながる。「知」は、「今だけ・金だけ・自分だけ」という欲望への開き直りとは対極の場所に息づくのです。

　「今だけ・金だけ・自分だけ」が、地球と人間を壊そうとしているとき、北野の教育・先達・現在活躍している卒業生の営みを、そうではない希望のともる事例として提示したいと思っています。そこにはもしかしたら反省もあるかもしれない。それも含め、たんなる思い出話にとどまらず、「次の百年」と「知」をどこか、腹の底に据えて、さまざまな原稿を綴っていただきたいと願っています。